

連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫



第 68 回

クマツヅラ科とキツネノマゴ科の植物たち



もとよし ふさお
本吉 總男

2022 年 10 月

クマツヅラ科もキツネノマゴ科もシソ目（目は科の上位のカテゴリー）に属する科です。したがって両科は遠い親戚というところでしょうか。

クマツヅラ科は日本では少数派（科に含まれる種^{しゅ}の数が少ない）です。クマツヅラ科の在来の野生種はクマツヅラとイワダレソウのみ。クマツヅラは日本では本州、四国、九州に分布し、多くはありませんがみずき野周辺でも見られます。イワダレソウは亜熱帯・熱帯に多く見られ、日本では、本州南部、四国、九州、沖縄など、温暖な地方に分布しています。イワダレソウはみずき野周辺には見られません。

キツネノマゴ科の野生種は、日本ではキツネノマゴ、キツネノヒマゴ、リュウキュウアイ、スズムシバナ、ハグロソウ、アリモリソウ、オギノツメ（中国原産の帰化植物）などが自生しています。クマツヅラ科と比べると必ずしも少数派とはいえませんが、関東でも見られるキツネノマゴとハグロソウを除いて、他の種^{しゅ}はいずれも温暖な地方に分布しており、みずき野周辺では、キツネノマゴしか見られません。なお、世界各地の亜熱帯・熱帯にはキツネノマゴ科の植物が多く見られ、それらの一部は植物園の温室で見られます。

クマツヅラ科にはビジョザクラ（バーベナ）やランタナなどの美しい園芸植物があります。キツネノマゴ科には園芸植物は少ないですが、よく知られたものにアカンサスがあります。

以下、みずき野または周辺で見られたクマツヅラ科とキツネノマゴ科の野生種と園芸種について述べることにします。

1 クマツヅラ科の植物たち

(1) クマツヅラ

クマツヅラは道ばたや水田のへりに生える多年草です。みずき野周辺では普通に見られる植物ではありません。10年ほど前には、小貝排水路にかかる金ヶ崎橋（守谷市本町）近くの水田のへりにクマツヅラがかなり生えていました。その後その数が次第に減っていき、最近ではほとんど見られなくなりました。後に、みずき野第2調整池の北側から小貝排水路に至る農道の道ばたにクマツヅラの小さな群落を見つけたにすぎません。



クマツヅラの花



クマツヅラの群生 7月中旬(13年前)
かつて守谷市本町金ヶ崎橋付近にあったが
今は絶えてしまったと思われる



クマツヅラの小さな群生 6月下旬
第2調整池の北の農道のへり(本町地区)

クマツヅラの学名は、バーベナ・オフィシナリス(*Verbena officinalis*)といます。日本ではバーベナといえ、ビジョザクラを指すことが多いのですが、クマツヅラもバーベナの一つです。オフィシナリスは「薬用の」という意味で、日本でも生薬として使われます。クマツヅラの中
国名は馬鞭草ばべんそうといい、この名は生薬名としても使われます。薬用成分は全草ぜんそう(花・葉・茎・根など植物の全ての部分)にあり、いくつかの有効成分を含んでいます。薬効としては解毒、消炎、利尿作用があり、煎じて飲みます。また、皮膚疾患にも外用されます。(以上は熊本大学薬学部 薬草園「植物データベース」のクマツヅラのページ、および公益法人東京生薬協会「季節の花(東京都薬用植物園)」のクマツヅラのページを参考にしました。)

クマツヅラの名は平安時代に編纂された「和名類聚抄わみょうるいじゅうしょう(和名抄)」(日本最古の漢和辞典)に「久未豆々良」と紹介されているそうです。クマツヅラは「熊葛」と書きますが、その由来には諸説があり、熊とは関係付けられず、「馬鞭草ばべんそう」から「ウマウツツラ(馬打葛)」、「その穂状花に米粒のような実が連なってつく」ことから、「米ツヅラ」という名に由来するとする説があるそうです。(以上は、重井薬草植物園のホームページ(おかやまの植物辞典:クマツヅラ(クマツヅラ科))を引用しました。)

クマツヅラは上記のように平安時代に編纂された和名抄に紹介されているそうですが、「古語辞典(旺文社)」の「くまつづら」の項には、下記の和歌が引用されています。

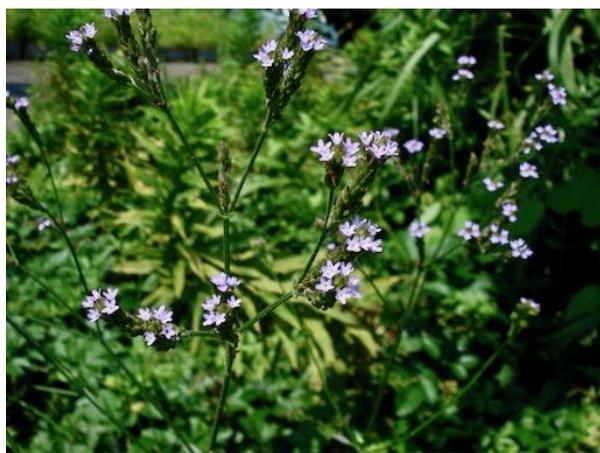
みちのく
陸奥の つつじの岡のくまつづら つらしと妹を けふぞしりぬる
いも
(六帖)

この歌の作者は平安中期の人、藤原仲平で、「六帖」とは、平安中期の私撰和歌集『古今和歌六帖』のことです。

「^{みちのく}陸奥の ^{じよことば}つつじの岡のくまつづら」は序詞で、「^{いも}つらしと妹を けふぞしりぬる」が本文です。つまり、「あなたはつれない人だと今日知らされた」ということでしょうか。序詞は本文を導き出すために使われますが、その意味するところはよくわかりません。『^{みちのく}陸奥の ^{みちのく}つつじの岡のくまつづら』は、都よりはるか遠方の陸奥に咲くクマツヅラを妹になぞらえて、手の届かない（つまり、つれない）人」という意味を込めているのでしょうか。『つつじの岡』は現在の仙台市宮城野区 ^{つつじがおか}榴岡 にあった歌枕のひとつです。

(2) アレチハナガサ

アレチハナガサは南アメリカ原産の多年生草本で、クマツヅラに似た^{そうほん}バーベナの仲間です。1957年頃に福岡県と神奈川県で帰化植物として発見されました。現在では関東地方以西に広がってしばしば大きな群落をつくっているようですが、在来種との競合が憂慮されているようです。みずき野周辺ではそれほど多くは見かけません。



アレチハナガサ 8月中旬 守谷市本町地区



アレチハナガサの花

(3) ヤナギハナガサ

ヤナギハナガサ(別名:サンジャクバーベナ)は南アメリカ原産で、おそらく園芸植物として導入されたと思われますが、1940年代に帰化植物として東海地方で確認され、以後全国的に広がっているようです。花が美しいので公園などに植えられているのを見かけます。みずき野ガーデンでも花が見られました。しかし、アレチハナガサと同様に帰化植物として、在来種との競合が憂慮されているようです。



ヤナギハナガサ 7月中旬 本町地区

(4) ビジョザクラ

ビジョザクラは南米原産のバーベナを改良した園芸植物です。本来多年草ですが一年草として扱われるものや、耐寒性がある多年草として毎年咲く品種もあります。その名は「美女桜」にふさわしく、多彩で極めて美しい花を咲かせます。標準和名はビジョザクラですが、「バーベナ」という名でも流通しています。



ビジョザクラ(バーベナ)5月中旬~下旬 みずき野中央広場花壇

(5) ランタナ

ランタナは熱帯アメリカに原産する多年草で、日本や多くの国で園芸植物として育てられています。標準和名はシチヘンゲですが、ランタナという流通名の方がよく使われます。シチヘンゲは開花後に花色が変化していくことから名付けられた和名です。多くの園芸品種があり、いずれも美しい花を咲かせるので、庭や鉢植えで育てている人もいますが、みずき野町内やその周辺の花壇では見たことがありません。



参考写真 ランタナ 10月下旬
横浜イングリッシュガーデンにて撮影



参考写真 ランタナ 10月下旬
神奈川県真鶴町のお林展望公園にて撮影

ランタナは温帯の各地では園芸植物として花壇を飾っている花ですが、熱帯・亜熱帯では野生化して害草となっている地方が少なくないようです。国際自然保護連合(IUCN)では、ランタナ(Lantana)を「世界の侵入的外来種ワースト100」のひとつに指定しています(["100 OF THE WORLD'S WORST INVASIVE ALIEN SPECIES"\(PDF\)](#))。

日本では小笠原諸島と沖縄県で野生化しており、環境への影響が懸念されています。しかし、ランタナは耐寒性が弱いので、関東地方など温帯の地方では、野生化して繁殖するおそれはないと思います。ただし、ランタナの果実は有毒物質を含んでいるので、口に入れないように注意する必要があります。

2 キツネノマゴ科の植物たち

キツネノマゴ科の植物の多くは熱帯・亜熱帯に分布しています。そのいくつかは、日本でも植物園の温室などで見られます。ここに載せた写真は、大船植物園で撮ったコエビソウとパキスタシス(両種ともメキシコ原産)ですが、これらは温度管理ができれば家庭でも栽培できるようです。

ハグロソウは関東地方南部以西に分布する植物で、高尾山にはかなり見られるようです。みずき野周辺では見かけません。次ページ右の写真は東京都練馬区東大泉の牧野記念庭園で撮ったものです。



参考写真 コエビソウ 5月上旬
大船植物園温室にて撮影



参考写真 パキスタシス 5月上旬
大船植物園温室にて撮影



参考写真 ハグロソウ 10月下旬
東京都練馬区牧野記念庭園にて撮影

(1) キツネノマゴ



キツネノマゴ 9月上旬 みずき野第2調整池

キツネノマゴは本州、四国、九州および東南アジアの温帯・亜熱帯に分布する一年草で、キツネノマゴ科の中で、唯一みずき野町内やその周辺で見られる植物です。みずき野では第2調整池の周辺によく見られます。茎の高さが10~40センチほどの小さな目立たない植物ですが、紫色の可憐な花を咲かせます。なお、沖縄と台湾にキツネノヒマゴという植物が分布しています。

キツネノヒマゴはキツネノマゴと同種^{どうしゅ}ですが、キツネノマゴより葉が小さいので、キツネノマゴ^{へんしゅ}の変種とされています。

(2) アカンサス

キツネノマゴ科の園芸植物のうち、関東地方でよく見かける植物はアカンサスぐらいでしょうか。アカンサスにはアカンサス・スピノサスとアカンサス・モリスがありますが、よく見るのはアカンサス・モリスです。したがって、単にアカンサスといえば、アカンサス・モリスを指すことが多いでしょう。アカンサス・モリスの標準和名はハアザミといますが、あまり馴染みのない和名です。

アカンサス・モリスは南ヨーロッパと北アフリカに原産する多年草で、葉の長さは50センチぐ
 らい。花穂^{かすい}をつける茎は1メートル前後になります。みずき野では、郷州公民館の庭の花壇に
 植えられたアカンサスが花を咲かせていました。



アカンサス 5月下旬 みずき野郷州公民館花壇



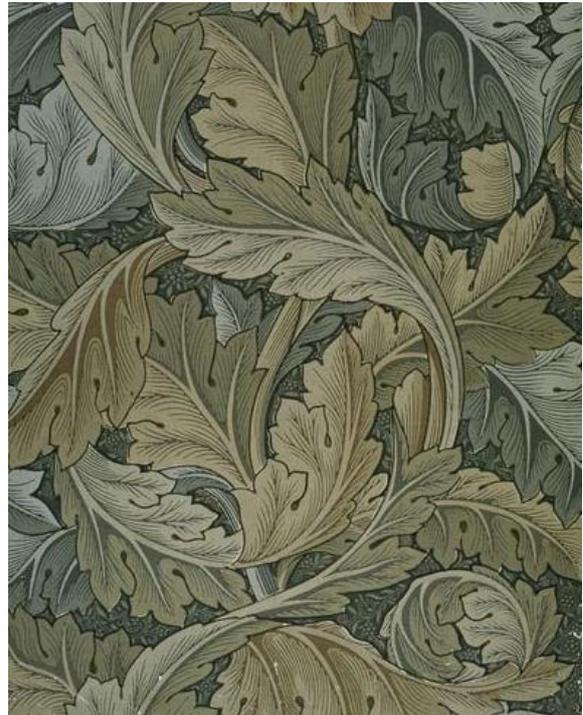
アカンサスの花

花をたくさんつけた花穂^{かすい}は魅力がありますが、葉が美しい植物でもあります。東京都台東区
 池之端にある旧岩崎邸庭園で見たアカンサスの葉の群れは印象的でした。

アカンサスの葉は、その端正な形から、ギリシャやローマを中心に様々な建築や工芸品のデ
 ザインに使われ、その紋様は多くの国々に伝わっていったようです。近代ではラファエル前派



参考写真 アカンサスの葉 3月中旬
 東京都台東区旧岩崎邸庭園にて撮影



ウィリアム・モリスのアカンサスのデザイン
 (壁紙) Wikimedia よりダウンロード

の画家たちと親交のあったデザイナー、ウィリアム・モリス(1834-1896)の作品(壁紙、染色物など)の多くにアカンサスの葉がデザインされています。

ウィリアム・モリスはデザイナーとしてよく知られていますが、そのほかにも工房「モリス・アンド・カンパニー」を設立し、この工房ではステンドグラス、陶器、金属細工、家具、壁紙、染色物を制作しています。また「ケルムスコット・プレス」という出版社を興し、詩人・文筆家として活躍しました。詩人としては、中世の気分で叙事詩をつくり、北欧のサガや散文のロマンスを含むさまざまな文学形式を試みました。これらの業績から、超人的な活躍をした人であったことがよくわかります。(以上『ウィリアム・モリスのデザイン』(創元社)の序文を参考にしました。)

ちなみに、ウィリアム・モリスとアカンサス・モリスは仮名で書くと両方とも「モリス」となってしまいますが、前者は Morris (ファミリーネーム)、後者は mollis (種名^{しゅめい})で、全く関係がありません。学名の Acanthus は「とげのある」、mollis は「やわらかい」という意味のラテン語です。